

泣かなくてもよい

ルカの福音書 7章 11-17節

はじめに

今日は、召天者記念礼拝です。私たちの教会の会員で、先に天に召された方々を覚えて、神様を礼拝します。また私たちはこの時、死の現実を見つめ、イエス様によって与えられている死を越える希望を覚えたいと願っています。

始めに、この教会の会員であった召天者の方々を紹介します。

馬淵聡子姉、高橋英子姉、工藤忠道兄、矢澤勝美姉、矢澤昭一兄、玉山ヨシ子姉、坂井宏明兄

1. 母親を襲った死の悲しみ

今日の聖書箇所には、ある母親の一人息子の葬儀で起こったイエス様の奇跡が書かれています。イエス様はある時、「弟子たちと大勢の群衆と一緒に」、「ナイン」という町に行かれました。するとその町の門で、「ある母親の一人息子が、死んで担ぎ出される」場面に、イエス様は出会うのです。

この母親は、「やもめ」でした。すでに夫を亡くしていたのです。夫を亡くした悲しみの中でも、愛する「一人息子」と何とか暮らしてきたのでしょう。この「一人息子」は「若者」であったようです。しかしこの一人息子も、若くして亡くなってしまったのです。親にとって、自分よりも先に子どもに先立たれるというのは、非常に辛いことです。愛する夫を亡くし、さらに愛する一人息子までも亡くすこの母親の悲しみは非常に大きなものがあったでしょう。彼女は家族を失いました。彼女にはもう家族がいません。ですから、「町の人々が大勢、彼女に付き添っていた」のです。

イエス様は、死という現実の前に愛する家族を次々と奪われ、孤独と悲しみの中にあるひとりの女性を目の前で見られたのです。

2. イエスの深いあわれみ

ではイエス様は、そのような彼女にどのような思いを抱かれ、どんな言葉をかけられるのでしょうか。13節を見てみましょう。「主はその母親を見て深くあわれみ、『泣かなくてもよい』と言われた」。

イエス様は、死の現実苦しめられている彼女を見て、「深いあわれみ」を示されました。この「深くあわれむ」という言葉は、「内臓」とか「はらわた」という言葉から派生した言葉で、「内臓が痛むほどの感情」「はらわたがよじれるほどの感情」を意味します。つまり、イエス様は彼女を見て、「深く心を痛められた」ということです。

この「深くあわれむ」という言葉は、「ルカの福音書」では、他に二か所出てきます。いずれも有名な譬え話の中で出てくるのですが、一つは10章にある「善きサマリア人」の中で出てきます。あるサマリア人が、強盗に襲われて半殺しにされたユダヤ人を見た時に「**かわいそうに思った**」とあります。この「かわいそうに思った」というのが、「深くあわれむ」という言葉です。イエス様はこの譬え話を、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という戒めを教えるために、語られました。つまりイエス様が抱いた「かわいそうに思う」「深くあわれむ」という感情は、「自分自身のことのように心を痛める」ということであったのです。

もう一つ、この「深くあわれむ」という言葉が出てくる譬え話は、15章にある「放蕩息子」です。父の財産を放蕩して使い果たした後、飢え死にしそうな状態で帰ってきた息子を、父が見た時、「かわいそうに思った」とあります。つまりこの「かわいそうに思う」「深くあわれむ」という感情は、「親が子どものことで心を痛める」時の感情でもあるのです。

これらのことから分かることは、イエス様は、次から次へと死の現実に苦しめられている母親を見て、「自分自身のことのように心を痛めた」「親が子どものことを思うような思いで心を痛めた」ということなのです。それが、イエス様の「深くあわれむ」という意味です。イエス様は、死の現実に苦しむ人々を、そのような眼差しで見られる方であるのです。自分のことのように、自分の子どものことのように、一緒に心を痛められるのがイエス様なのです。

イエス様は彼女に、「泣かなくてもよい」と言葉をかけられます。彼女は深い悲しみの中で、涙するほかなかったのでしょうか。私たちは、夫を亡くし、続けて一人息子までも亡くすという深い悲しみを抱える人に、どんな言葉をかけられるのでしょうか。私たちは言葉を失い、かける言葉もありません。なぜなら私たちには、その悲しみを解決する力がないからです。しかしイエス様は、「泣かなくてもよい」という言葉をかけられます。それは、イエス様にはその人の悲しみを根本的に解決する力があるからではないのでしょうか。イエス様には、その人の涙をぬぐい去る力があるからではないのでしょうか。イエス様が、愛する人を失った遺族に語りかける言葉は、「泣かなくてもよい」という言葉なのです。

3. 若者よ、あなたに言う。起きなさい。

ではイエス様は、彼女の悲しみをどのように解決されるのでしょうか。どのように彼女の涙をぬぐい去るのでしょうか。14-15節を見てみましょう。「**そして近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは言われた。『若者よ、あなたに言う。起きなさい。』すると、その死人は起き上がって、ものを言い始めた。イエスは彼を母親に返された。**」

イエス様は、彼女の一人息子をよみがえらせ、彼女に一人息子を返されることを通して、彼女の深い悲しみを解決され、彼女の涙をぬぐい去られたのです。イエス様は、死人に語りかけられ、死人がイエス様の言葉に従って、起き上がり、よみがえったのです。

私たちは、遺族には言葉をかけますが、死者には言葉をかけません。死者の魂はすでに天国にあり、遺体は亡骸に過ぎないからです。それゆえ死者は、私たちの言葉に応答することはできません。日本では、葬儀において「弔辞」というものがあって、故人へ別れの言葉を贈ることがあります。しかし、それはあくまでも、遺された者たちから故人への一方的な言葉に過ぎません。

私たちは、死者に語りかけることができたとしても、死者はそれに応答することはできません。しかしイエス様の言葉は違うのです。イエス様の言葉は、死者の耳に届くのです。そしてイエス様の言葉は、死者も応答するのです。死者は、イエス様の言葉には従うのです。

イエス様は、死者をよみがえらせる力のある方です。私たち人間には、死を解決することはできません。私たち人間は、死に対して全く無力です。医療が発達して、多くの病が癒されるようになりました。延命措置もできるようになりました。しかし、一度死んだ人をどうすることもできません。死ぬまでは、色々と手を尽くすことができて、死んでしまったら、私たち人間にはどうすることもできないのです。死は、私たち人間にとって、最大の敵、最大の悲しみと言えるでしょう。

ヘブル 2：14-15 には、こうあります。「**子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためにした**」。ここでは、私たちは、「死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々」であると言われていました。確かにそうです。私たちは、死を恐れ、死に脅えながら生き、死に対して全く無力で、ただ死の力に従うほかありませんでした。しかしイエス様は、死の力を滅ぼし、私たちを死の恐怖から解放するためにこそ、肉体をまとしてこの地上に来られた神であると言うのです。つまりイエス様は、私たち人間の死の問題を解決するためにこそ、この地上に来られたと言うのです。

使徒パウロもこう言いました。「**今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不滅を明らかにされたのです**」(II テモテ 1:10)。イエス様は、死を滅ぼすために、この地上に来られたのです。では、イエス様は、どのように死を滅ぼされたのでしょうか。それは、十字架と復活においてです。死は、私たち人間の罪によってこの世にもたらされたものです。ですからイエス様は、私たちの罪の罰を身代わりに受け、私たちの罪を償うために、十字架で死なれたのです。私たちが死の絶望を味わう代わりに、イエス様が死の絶望を味わわれたのです。そしてイエス様は、十字架の死から三日目に死人の中からよみがえり、死の力に打ち勝たれたのです。このイエス様の十字架と復活が、私たちの死に対して希望を与えてくれるのです。私たちにとって、絶望でしかなかった死が、イエス様の十字架と復活によって、希望へと代えられたのです。

私たちは確かに死を迎えます。しかし死は絶望ではないのです。黙示録 14：13 には、

こうあります。「**今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。…その人たちは、その労苦から解放放たれて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともにについて行くからである**」。イエス様を信じる人にとって、死は絶望ではありません。なぜなら、死は天国への入口であり、あらゆる労苦から解放され、全き安らぎに包まれる時だからです。そして、私たちの良き行いが報われる時だからです。

しかしイエス様が再びこの地上に来られる世の終わりの時には、死は完全に滅ぼされます。黙示録 21：3-4 には、こうあります。「**見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から、涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しむこともない。以前のものが過ぎ去ったからである**」。イエス様がこの地上に再び来られる最後の審判の時、死は完全に滅ぼされるのです。私たちのからだはよみがえり、私たちは神様と共に新天新地で永遠に住むことになるのです。そこでは、死はもはやありません。それゆえ、「悲しみも、叫び声も、苦しむこともない」のです。私たちの涙は、この時に「ことごとくぬぐい取られる」のです。

「ナイン」の町で起こったやもめの母親の一人息子をよみがえらせる出来事は、この時を映し出しているのではないのでしょうか。イエス様が語られた「泣かなくてもよい」「あなたに言う。起きなさい」という御言葉は、この時にこそ、私たちの内に完全に実現するのです。私たちが死の現実の中で、度々、涙を流す時もあるでしょう。しかし私たちは、永遠に「泣かなくてもよい」のです。私たちは、必ず涙がぬぐい去られる時が来るのです。必ず死が滅ぼされる時が来るのです。そして、イエス様の「起きなさい」という御言葉を聞く時が来るのです。

おわりに

「ナイン」の町で、イエス様の奇跡を見た人は、16 節のように反応しました。「**人々はみな恐れを抱き、『偉大な預言者が私たちのうちに現れた』とか、『神がご自分の民を顧みてくださった』と言って、神をあがめた**」。奇跡を見た人は、イエス様のことを預言者エリヤだと考えました。預言者エリヤも、ある女性の息子をよみがえらせたことがあったからです。またある人は、イエス様のことを、エジプトからイスラエルを解放したモーセのように、ローマ帝国から解放してくれる政治的指導者だと考えました。しかし、イエス様は、そのどれでもありません。13 節で、「主はその母親を見て深くあわれみ、『泣かなくてもよい』』と言われた」とあります。イエス様は、預言者でも、政治的指導者でもなく、「主」ご自身なのです。つまり「神」ご自身なのです。死の現実苦しむ私たちを救うために、天からこの地上に来られて、肉体を取られた「神」そのものなのです。そのことを信じる時に、私たちは、死を超える希望を頂くことができます。そのことを信じなければ、死は私たちにとって絶望でしかありません。どうかここにいる皆さんは、イエス様を信じていただきたいのです。イエス様こそ、死を滅ぼし、死に希望を与える真の神であると言うことを。

天におられる私たちの父なる神様。

この教会から、先に天に召されていった兄弟姉妹を覚えます。彼らは皆、主にあって死を迎えました。今は、あらゆる労苦から解放され、全き安らぎに包まれ、良い行いに対する報いを与えられていることでしょう。私たちもやがて死を迎えますが、主にあって死を迎えることができますように。死のうちに、希望を見出すことができますように。

イエス様の「泣かなくてもよい」という言葉に慰めを抱きつつ、やがて語られる「起きなさい」という言葉を待ち望むことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。